

2009年度「医薬看連携早期体験学習」報告

明石恵子¹⁾、早野順一郎²⁾、木村和哲²⁾
 浅井清文²⁾、鈴木匡³⁾、前田徹³⁾
 飯塚成志²⁾

名古屋市立大学は、医学部、薬学部、看護学部が設置されている数少ない大学の一つである。その特色を活かして、2009年度に「医薬看連携早期体験学習」が三学部の教養教育科目（2単位60時間）に位置付けられた。本稿では、その企画運営、科目の意義、学習目標、学習方法と学習内容、成績評価方法、学習成果および今後の課題を報告する。

1. 企画運営

2009年度の「医薬看連携早期体験学習」は7名のコースディレクタによって企画および運営が行われた。7名の内訳は医学研究科4名（教授3名、助教1名）、薬学研究科2名（教授1名、講師1名）、看護学部1名（教授1名）である。早野医学教育センター長を中心に、コースディレクタ全員が後述する学習内容それぞれのコーディネータとしての役割も果たしている。また、学生への実際の教育は、医学研究科、薬学研究科、看護学部、附属病院の教職員、非常勤講師、地域の病院や役所の関係者など、多くの方々の協力と支援によって成り立っている。

ここで本科目開講の経緯を紹介する。発端は、2007年8月、附属病院外来診療棟4階研修室の利用方法の検討であった。ちょうどその頃、医学・薬学・看護学の連携による教育および研究を強化するという大学の方針があり、教育に関する連携の検討と実施がこの時に集まったメンバー（医学研究科2名、薬学研究科1名、看護学部1名）に任された。そのため医薬看教育連絡会と称してメンバーを増やし、各学部のカリキュラム方針や科目構成、時間割をもとに、三学部による連携教育の方法と内容を検討した。その結果、2008年度に医学部と薬学部の1年生に対する「医療系学部連携早期体験学習」を開講することができた。看護学部は、カリキュラムの都合上、学生の受講はできなかったが、教員が授業の一部を担うことで参加した。その後、看護学部のカリキュラムが変

更され、2009年度に三学部の学生と教員による「医薬看連携早期体験学習」の開講に至った。

2. 科目の意義

「医薬看連携早期体験学習」は1年次前期の教養教育科目として開講され、初年次導入教育としての意義をもつ。すなわち、学生が大学生としての学習方法を修得するとともに、将来の医療専門職者としての自覚をもつことをねらいとしている。また、医学部、薬学部、看護学部の学生による混成グループで学習するため、学部を超えた仲間づくりが可能となる。このことによって、それぞれが目指す職種の役割をお互いに理解し、チーム医療の基盤を形成することができる。

3. 学習目標

本授業の学習目標は、次の通りである。

「社会の中で医療を支える一員となるための第一歩を元気に踏みだし、医療現場に主体的に参加し、爽やかに信頼される学生となるために、医療に関わる全ての者が身につけるべき基本的な技能と態度を修得し、医療が多くの人の繋がりによって支えられていることを理解し、後に続く学習の基盤となる、学部や学年を超えた学生、教員との人間的信頼関係を築く。」

また、行動目標は、次の11項目である。

- ① 自学名市大を知り、本学学生としての誇りをもつ。
- ② 医療を学ぶ者としての高い倫理観を持ち規律を守ることができる。
- ③ 医療を構成する様々な職種や業務と現場で働く人々の努力を概説できる。
- ④ 医療現場における安全と患者さんからの信頼を第一とする態度がとれる。
- ⑤ 医療に関わる様々に人々に対し礼儀正しく協調

1) 名古屋市立大学看護学部

2) 名古屋市立大学大学院医学研究科

3) 名古屋市立大学薬学研究科

的な態度がとれる。

- ⑥ 患者さんと共感的なコミュニケーションがとれる。
- ⑦ 医療従事者のための標準感染予防策を実施できる。
- ⑧ 介助の基本的スキルを安全に行うための留意点を述べることができる。
- ⑨ 高齢者の介助において、相手の立場に立った配慮ができる。
- ⑩ 一次救命処置 (Basic Life Support) を実施できる。
- ⑪ 問題解決のための生産的な討論やグループ作業ができる。

4. 学習方法と学習内容

1) グループ編成

医学部、薬学部、看護学部の学生の混成による24グループが形成された。2009年度の1年次学生は医学部93名、薬学部63名、看護学部86名、合計242名であったため、各グループは医学部生3-4名、薬学部生2-3名、看護学部生3-4名、合計10-11名で構成された。

2) 学習スケジュール

「医薬看連携早期体験学習」は毎週金曜日1-2限目に開講された。具体的なスケジュールは表1の通りであった。本年度は、新型インフルエンザ感染予防対策のため、3回目の授業が休講となり、内容が一部変更された。

3) 学習内容

(1) 講義

講義は、社会や医療の現実を知り、大学生として、そして医療人としての自覚を高めることをねらいとして、以下の内容で行われた。

- ① タバコ・覚醒剤・麻薬に対する注意 (医学研究科 前野善孝准教授)
- ② ボランティア論 (名古屋市瑞穂区社会福祉協議会次長 瑞穂区西部地域包括支援センター 平坂義則氏)
- ③ 薬害サリドマイドから学ぶ一薬害の教訓は生かされているのか (財団法人いしづえ サリドマイド福祉センター常務理事 増山ゆかり氏)
- ④ 愛知県の地域医療の現状と課題 (愛知県西三河福祉相談センター長 片岡博喜氏)



表1 医薬看護連携早期体験学習スケジュール

課題研究

グループ	1 4月17日	2 4月24日	3 5月1日	4 5月8日	5 5月15日	6 5月22日	7 5月29日	8 6月5日	9 6月12日	10 6月19日	11 6月26日	12 7月3日	13 7月10日	14 7月17日	グループ	
A				グループワークの進め方(KJ法)(62名) [薬学部薬友会館]	ロールプレイ(62名) [外来棟研修室]	基本的スキル(62名) [看護学部実習室]	BLS(62名) [病院会議室]	感染予防(医学部・水野) 9:00-9:45 地域医療(行政の立場から・愛知県担当者) 9:45-10:30 大学病院看護部について(看護部・小黒) 10:30-11:00 グループ実習・自由研究オリエンテーション 11:00-12:10 [病院大ホール]	臨床体験(41名)							A
B																B
C																C
D																D
E																E
F	理事長からのメッセージ 9:00-9:20 オリエンテーション 9:20-9:30 タバコ・覚醒剤・麻薬への注意(医学部・前野) 9:35-10:35 オリエンテーション2 10:45-12:10 [病院大ホール]	ポランディア(社会福祉協議会・平坂義則講師) 9:00-10:30 薬害サリドマイドから学ぶ(薬害被害者の会・増山ゆかり講師) [病院大ホール]	休講	グループワークの進め方(KJ法)(60名) [病院会議室]	グループワークの進め方(KJ法)(60名) [薬学部薬友会館]	基本的スキル(60名) [看護学部実習室]	基本的スキル(60名) [看護学部実習室]			臨床体験(51名)						F
G																G
H																H
I																I
J																J
K																K
L																L
M																M
N																N
O																O
P																P
Q												臨床体験(50名)				Q
R																R
S																S
T																T
U																U
V																V
W																W
X													臨床体験(50名)			X
病棟	17	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	
内科診療部	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
人工透析部	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	
栄養管理係	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
薬剤部	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
調剤薬局	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
合計	41	51	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	

グループワークの進め方・KJ法の説明を受け、各グループでテーマに沿った討議を行い、結果を発表する【コーディネート・薬学部(大矢)】

ロールプレイ:シナリオに沿って患者、医療者を演じ、その後討論する【コーディネート・医学部(早野)】

基本的スキル:3つのスキルブースをローテーションしながら患者体験、医療者体験をする【コーディネート・看護学部(明石)】

BLS:3人1組で一次救命処置技術を学ぶ(蘇生人形を20体準備)ーインストラクターに医学部3年生の協力を得る【コーディネート・医学部(飯塚)】

課題研究:「自学名市大を知る。」を目的に各グループ毎に与えられたテーマに沿って調べ、発表する

臨床体験:各グループで病棟、内科診療部、人工透析部、栄養管理係、薬剤部、調剤薬局を見学する



- ⑤ 感染対策（医学研究科 水野晴夫講師）
- (2) 基本医療技能実習
- 基本医療技能実習は、後述する臨床体験とグループ研究を円滑に進めるために必要な技術および一次救命処置（Basic Life Support: BLS）の修得を目指して行われた。内容や方法は次の通りである。
- ① グループワークの進め方（コーディネータ；薬学研究科 大矢進准教授）：討議の一方法としてKJ法の説明を受け、各グループでテーマに沿った討議を行い、結果を発表する。
- ② ロールプレイ（コーディネータ；医学研究科 早野）：シナリオに沿って患者と医療者を演じ、その後、討議する。
- ③ 基本的スキル（コーディネータ；看護学部 明石）：手指衛生の方法、車椅子・ストレッチャーへの移乗と移送、高齢者の疑似体験を通して、患者の気持ちを知り、医療者としての接し方を考える。
- ④ BLS（コーディネータ；医学研究科 飯塚）：心肺停止の傷病者に遭遇した時の対処方法を修得する。
- (3) 臨床体験
- 医療の実際を知ることが目的に、名古屋市立大学病院（以下、名市大病院）を中心に、医師、薬剤師、看護師などが働く場面の見学機会が与えられた。なお、学生は、自分が目指す職種以外の医療職者が働く場面を見学するよう配置された。
- ① 病棟：名市大病院看護部小黒智恵子副看護部長および病棟看護師長の協力を得て、医学部・薬学部の学生が病棟看護師の行動を見学した。
- ② 人工透析部：医学研究科吉田篤博准教授および名市大病院透析室の協力を得て、薬学部・看護学部の学生が見学した。
- ③ 内視鏡部：医学研究科中沢貴宏准教授および名



市大病院内視鏡検査室の協力を得て、看護学部の学生が見学した。

- ④ 栄養管理室：名市大病院栄養管理係の協力を得て、医学部・薬学部・看護学部の学生が見学した。
- ⑤ 薬剤部および調剤薬局：名市大病院薬剤部および名古屋市薬剤師会の協力を得て、医学部・看護学部の学生が見学した。
- (4) グループ研究
- 「自学名市大を知る」を目的として、学生は、グループごとに与えられた研究課題に取り組んだ（表2）。それぞれの研究課題にはキーパーソンと支援者をおき、グループ研究をサポートしていただいた。各グループの研究成果は、本授業の最終日にポスターで発表された。

5. 成績評価方法

成績評価は、次の4つの視点で行われた。

- ① 出席：体験学習を主とした科目であるため、8割以上の出席を基準とし、すべて出席し、遅刻・早退がなければ加点した。無断遅刻・無断早退はそれぞれ1回の欠席とみなし、無断欠席の場合は単位を取

表2 医薬看護学部連携早期体験学習 グループ研究の課題

グループ	研究課題	キーパーソン(相談者) 昨年同じテーマで研究を行った2年生のグループにも相談すること			研究支援分野・教員	
		所属	氏名		学部	講座
A	なごやユニバーサル・エコ・ユニット(UEU)	医学部3年生	志水祐介様		医	解剖学Ⅰ
B	共同研究教育センター	共同研究教育センター	清水秀夫技師 大島茂技師		医	臨床検査医学
C	在宅療養介護相談室 ケアマネージャ	在宅療養介護相談室	中西様		医	生化学Ⅰ
D	糖尿病教室	臨床薬学教育研究センター	菊池千草講師		薬	臨床薬学教育研究センター
E	院外処方とジェネリック	臨床薬学教育研究センター	鈴木 匡教授		薬	臨床薬学教育研究センター
F	感染制御室	感染制御室	中村 敦 室長		医	生理学Ⅱ
G	褥創対策チーム	皮膚科	森田明理教授		医	病理学Ⅰ
H	医療安全管理室	医療安全管理室	山田礼子主幹		看	多田豊曠教授
I	遠隔地医療(豊根村)	医学教育センター	早野順一郎教授		医	内科学Ⅰ
J	骨髄バンク	医学部5年生	小笠原治様		医	内科学Ⅱ
K	地域医療(南知多地域)	医学教育センター	早野順一郎教授		医	内科学Ⅲ
L	抗がん剤と外来化学療法室	薬剤部	木村和哲部長		医	臨床薬理学
M	緩和ケア部	緩和ケア部	明智龍男部長		医	細菌学
N	臨床試験管理センター 治験相談室	中枢神経機能薬理学	田辺光男准教授		薬	中枢神経機能薬理学
O	患者相談室(各種相談室、支援室)	患者相談室	田淵タカ子様		医	衛生学
P	漢方薬	口腔外科	横井基夫部長		医	整形外科学
Q	先端薬学研究施設	薬品合成化学	近藤和弘准教授		薬	薬品合成化学
R	実験動物研究教育センター	実験動物研究教育センター	三好一郎センター長		医	産科婦人科学
S	患者情報ライブラリ	患者情報ライブラリ	脇田恵美子所長		看	山本喜通教授
T	蝶ヶ岳ボランティア診療所	医学部3年生	丹羽俊輔様		医	皮膚科学
U	RI(アイソトープ)研究施設	アイソトープ研究室	石原正司技師		医	分子遺伝
V	障害者問題研究会	医学部3年生	鬼頭祐輔様		医	放射線医学
W	遺伝子組み換え	病態生化学	服部光治教授		薬	病態生化学
X	物品供給センター	物品供給センター	平井邦明様		医	病態生化学

得できないことがあるものとした。これによって、チーム医療における報告や連絡の重要性を学生が自覚するように仕向けた。

- ② 臨床体験：身だしなみや行動など医療を学ぶ者としての最低限の自己管理を行うこと、そして、「臨床体験を通しての学び」をテーマとするレポートの提出を基準とした。レポートをA・B・Cの3段階で評価し、A評価とB評価に加点した。
- ③ ポートフォリオ：本科目は学生の体験による学習を重視しているため、自分自身の成長の記録としてのポートフォリオを課し、指示に従ってポートフォリオを作成・提出することを基準とした。A・B・Cの3段階で評価し、A評価とB評価に加点した。
- ④ 課題研究：グループでポスター発表用の資料を作成し、発表することを基準とした。学生による評価と教員によるグループの評価を行い、上位3グループに加点した。

6. 学習成果

授業評価の視点に沿って、学生の学習成果を概観する。まず、出席については、講義および基本医療技能実習、臨床体験において欠席者や遅刻者がいたが、いずれも決

められた方法で連絡がなされていた。課題研究は時間割上の日時だけでなく、各グループが自主的に集まって学習をしていた。課題研究の発表会では、大幅に遅刻をした者が3名いた。理由を聞くと、朝方まで課題研究やポートフォリオを作成していたとのことであった。いずれの学生も遅刻の連絡はなく、連絡するよりも早く登校したほうがよいと判断したと言っていた。これに対して、その意見も認めたくえで、学生を待っている者は心配していることを伝え、連絡の必要性を再度指導した。なお、履修者242名中長期欠席者が4名あり、本授業を履修しなかった。

次に臨床体験において、身だしなみを含めた自己管理は、ほとんどの学生が指示されたユニフォームを着用し、頭髪や整容に問題はなかったが、注意を要する学生が数名いた。具体的には、寝不足で出席し気分不良のため実習が継続できなかった、実習用シューズを忘れた、自宅からユニフォームで登校した、などであった。それぞれ個別に指導し、医療を学ぶ者としての自覚を高めるよう促した。臨床体験のレポート内容は、初めて見る医療現場への驚きや感激、感心などが表現され、それぞれの職種に対して予想を超える多忙さや役割の重要性を認識した様子が記述されていた。

ポートフォリオの評価の視点は、情報の整理、自分で

集めた文献・資料、創意・工夫、成長記録の4点であった。学生は、本授業の初回到学部別に色分けされたファイル（医学部生；青、薬学部生；黄、看護学部生；赤）を渡され、配布された資料や自分で作成した資料などを経時的にファイリングするよう指示されていた。しかし、学生によってポートフォリオの内容は異なり、配布された資料のみが雑多に綴じられているもの、きちんと揃えてインデックスがつけられているもの、積極的な自己学習がなされているものなど、さまざまであった。また、成長記録の「成長したこと」には、グループワークの方法が身に付いた、相手の立場を考えて行動できるようになった、BLSができるようになった、医療の現場の大変さを痛感した、それぞれの職種の責任の重さを感じた、チーム医療の実際がわかった、などが記述されていた。そして、それらの学びをこれからの学生生活、さらに医療従事者になった時に活かしていきたいと異口同音に述べられていた。

最後に課題研究は、全てのグループが与えられたテーマについて調べたり、考えたりしたことをまとめ、ポスター発表することができた。発表会場では、グループごとに自信に満ちた発表が行われ、それに対する質疑応答も非常に活発であった。また、学生および教員による評価が行われたが、それぞれに高く評価されたグループは異なっていた。

7. 今後の課題

授業評価アンケートには199名の学生が回答した。総合評価は4.21（教養教育科目平均4.18）であり、各評価項目をみても、全体の平均点よりわずかに高い評価が得られた。また、達成項目別にみると、問題発見解決能力41.7%（教養科目平均35.3%）、自己能力向上57.8%（同52.4%）、社会的視野60.8%（同63.9%）、知的関心49.3%（同51.2%）であった。一方、自由記述欄には、「医療人となる人間としての意識が高まった」、「視野が広がった」、「他学部の人との交流がもてた」、「楽しかった」、「名市大だけにしかできない授業」など、授業内容に対する肯定的な意見が多かった。しかし、「疲れた」、「大変だった」、「早期体験の意義を見いだせない」といった否定的な意見もあった。また、「説明不足」、「決まっていないことが多かった」、「発表会の会場が狭い」など、運営上の課題も記述されていた。

以上の結果を総合すると、医療現場における課題に関する講義、基本医療技能実習における議論方法や基本的医療技術の修得、医療現場の体験や医療従事者からの直接指導、グループワークにおける課題探求型の学習や他学部の学生との交流などによって、学生は、本授業の学

習目標を概ね達成することができたと評価できる。しかし、運営面では、調整不足な点が多々あり、次年度はその点を改善する必要がある。そして、本授業は名古屋市立大学の教職員、非常勤講師、地域や病院の関係者など多くの方々の協力がなくては実現しないことをふまえ、関係各位との繋がりを大切にするとともに、名古屋市立大学医学部・薬学部・看護学部の看板授業となるよう努力していきたいと考える。